

ががんぼの脚

森岡 正作

裸にて

大道芸 薄暑の街に火を吹けり
杜若 見る 正眼の構へして

花は葉に鯉の憂鬱 始まれり

虎尾草のそよと噂を聞き流す

木下 閤 鰭 あるやうに急ぎけり

ががんぼの脚あつさりと置いてゆく

蝮 捕り人遠ざけて老いにけり

登四郎先生に「裸にて削ぎに削ぎたる詩のかたち」という句がある。平成五年の作であるが、ずうっと若い時の昭和三十六年には「発想のひしめく中の裸なり」という句を作っている。

同じ「裸」という言葉でも、若い時の句の「裸」は具体的な裸を連想させて、余計な衣類など身に付けず身軽な涼しい気持ちでいると、要らぬ雑念も消えて必要な言葉や発想が次々と湧いてくる。それを整理出来ないくらいだという感じで句も荒々しく若々しい。

それに対して冒頭の句を、裸のままで句作に専念していると解釈するのはつまらない。その「裸」は「削ぎに削ぎ」との関連で何も着ることのない裸と、何も飾ることのない詩の言葉という共通性を表したのではなかるうか。「裸」という李語の本意からはずれると思うが、無用の言葉を「削ぎに削ぎ」いだ「詩のかたち」こそ俳句である。